

北欧＝最近障害者事情 PARTⅡ ● 第1話 ●

学ぶことはたらくこと<スウェーデン>

全国障害者問題研究会事務局長
日本障害者協議会理事

菫部 英夫

ノーベル賞の晩餐会が開かれる古いレンガ造りのストックホルム市庁舎。そこから地下鉄で南に6駅目。パリッとした朝の空気の中、集合住宅と一戸建ての交じった静かな住宅街が広がる。2008年の秋の一日、私は北欧・スウェーデンにいる。

■ のびのび、じっくり学べる条件

市立リンデパーケン高校は知的障害者の特別高等学校だ。生徒104人が60人のスタッフ（教員25人、アシスタント25人、その他管理職やレストランスタッフ）と4年間学んでいる。スウェーデンでは義務教育は9年間だが、知的障害のある子どもたちは10年間ゆるやかに教育しているという（高校は2年間延長も可能だ）。

食堂で応対してくれたのは、校長のグンさん（『長靴下のピッピ』の作家・リンドグレン似）と職業教育30年のベテラン・ピエールさん。

- 知的障害は、心理学の専門家などにより「軽い」「中度」「重い」「自閉症」と4つの判定があり、この高校の入学資格は「軽い」と「中度」。「重い」「自閉症」の子らはそれぞれ別の学校がある。
- いいところを伸ばす教育プランで、「成績」もある。特に力を入れているのは健康づくり。本格的なトレーニング機器も揃っている。週1回は専門家が、週2回はクラスの教員が指導する。
- 家庭とも連携して肥満対策にとりくんでいる。
- 社会での体験を重視し、農業大学での牧畜体験合宿や2年に1度は海外旅行をみんなで計画する（教育に関わる費用はすべて無料）。
- 国語、算数、体育、創造、社会科などを学ぶ。

校内を見せてもらうと、木工の教室では職人顔負けの作品をつくる青年もいれば、楽しそうに木とたわむれる青年もいる。生徒たちの作品が飾られた廊下を通して、テキスタイルの教室に行くと、劇で使

うための人形づくりににぎやかだった。みんな器用にハサミやのこぎりを使う。

さて、お昼時、案内された部屋には、すてきなサプライズが待っていた。レストラン専攻の3年生たちが実習としてコースのランチをサービスしてくれたのだ（写真1）。



この写真を見て、私の友人の障害児のお父さんは、思わず泣きそうになったそう。「うちの娘がダブるのかな」。

息子さんが高等部1年という別の友人は、つねづね、「もっと学校に居させたいよね～」と他のお母さんたちと話をしているそうだ。

曰く、「高校3年では短すぎる。じっくり育てて欲しい。『特別な支援を必要とする人たち』なんだから、高等教育で時間をかけて、社会へ出る準備をもっとさせる方法だってあっていいですよね」。同感だ。

■ 一流のカフェテリアはデイケアセンター

高校のある駅から中心街に戻り、そこから西へ6駅ほど行ったところに、卒業生たちが働いているレストランがあるという。駅名はテレフォンプラン＝「電話広場」？ エリクソン、IBMの看板が目につくIT関連企業や大学の街だ。

メモ

■教育機関への国・自治体の支出（対GDP比）
日本3.4 スウェーデン6.2 フィンランド5.9

■高等教育に占める家計の負担割合
日本53.4 スウェーデン0 フィンランド3.9

□資料「北欧ノート」

<http://www.nginet.or.jp/~kinbe/>

「グランサードゴンゲン」は、工場跡を巧みにデザインした明るくて清潔なレストラン。ここが50人の障害者が働き、18人の市の職員が支援サポートするデイケアセンターだ。

「レストランにとりくむデイケアは全国に広がっている。かつてロックバンドの演奏活動がトレンドのときがあったが。食事はいつでも必要なことだから」「ここで働くには、高校の先生の薦めで実習を3週間。そして双方がOKならばOKになる。ここが自分に一番いい場所と感じる感覚が大事なんです」。

スタッフの一人、静かな青年・ヨナスが解説してくれた。福祉の専門の勉強はしてこなかった彼は、週1日は、仕事として高校で福祉を学んでいるという。

厨房を見せてもらった（写真2）。彼や彼女たちは、じつに一生懸命だ。でも、なんだろう、とても伸びやかで楽しいそうだ。

高校でレストランのことや、手仕事などを学び、「私はなににもできない」のではなく、「私はニンジンがむける」「ジャガイモの皮がむける」「タマゴの殻を割れる」。だから、「あなたがいないとニンジンが、ジャガイモが、タマゴがお客さんに出せない」。そこに、自信と責任感が生まれ、喜びが感じられるのだろう。

「はたらく」とは「傍を楽にすること」と聞いた



ことがある。彼や彼女たちを見ていると、自分たちの仕事がお客さんを喜ばせ、感謝され、そしてなによりも、自分たちがみんなで調理したり、接待したりできる。そのことが楽しくてたまらないようだった。

高校のグン校長は言っていた。

「基礎学校で統合教育といっても、同じ敷地内にはいるものの、特別クラスで10人くらいの小規模です。みんなといっしょに学んでというわけではありません。本人にとっては小さい社会です。ここ（高校）では全部、いままでなかったことがあります。ここの4年間で人間性がずっと大きくなる」。学ぶことはたらくことの基本が育まれているのだろう。

市営のデイケアセンターだから、「金儲け」の追求の必要はない。彼や彼女たちの生活の基本は障害者年金だ。同年齢の市民と同じ程度の所得がある。どこかの国のように「施設利用料」も強要されない。地元でとれた新鮮な食材を使い、ゴミや残りものはバイオガスになるようにエコ処理を徹底する。そして、なによりもおいしくて安い（2割安!）。たっぷりの野菜サラダがあり、コーヒー+飲み物付だ。

11時をまわると、周りの会社の労働者たちの行列ができていた。4月にオープンしたばかりだそうだが、口コミで評判は確実に広がっている。（つづく）

